

推論過程の二つのモデル

——「ている」と「た」の解釈より*——

西山淳子

Abstract

The interpretations of the perfect marker *-te-i-ru* and the past marker *-ta* can be both obtained via pragmatic inferences in Japanese. However, the processes which trigger those inferences are different between them. This paper suggests two models of inference process, i.e. semantics-triggered inference process and system-triggered inference process, based on their semantics and structural distribution in the language. Those models correctly explain the results from the corpus studies on the perfect and the past in English and Japanese.

Keywords : 過去形, 完了形, 日本語, 英語, コーパス

はじめに

日本語の「ている」と「た」は、英語の現在完了形と過去時制に対応する用法を持つが、多様な解釈を持ち、それらの解釈は語用論的推論を通じて得ることができると考えられる。本稿では、日本語の「ている」と「た」と英語の完了形と過去形の意味とその解釈に使われている推論を調べ、その傾向を考察する。そして、それらの解釈過程を捉える二つの異なるタイプの推論過程のモデルを提案し、その二つのタイプの過程によって生ずる推論が「ている」と完了形、「た」と過去時制の実際の使用において、どのように現れるかを、英語と日本語のコーパス研究によって明らかにする。

1. 「てい(る)」と「た」の多様な解釈と意味

1.1 「ている」と英語の完了形

日本語の「てい(る)」は、例文(1a) - (4a)が示すように、進行、結果、経験、過去からの動作の継続など、多様な解釈を持つ。一方、英語の完了形は(2b) - (4b)に示すように、結果、経験、継続などの解釈を持つ。

- (1) a. たけしが(すでに/今)手紙を書いている。
b. Takeshi is writing/has written a letter .
- (2) a. 木が倒れている。

b. Trees have fallen.

(3) a. たけしは以前に富士山に登っている。

b. Takeshi has climbed Mt.Fuji before.

(4) a. たけしはさっきからずっと走っている。

b. Takeshi has been running since a while ago.

多くの研究で完了形は多義性を持つと見なされてきたが (Michaelis 1998, Portner 2003), 西山 (2004) と Nishiyama and Koenig (2004, In Press) では, 完了形の多様な用法は一つの意味から推論によって得ることができることを示している。つまり, 完了形の意味は, 参照時間 r (現在完了では発話時間) より以前に起こった事象 (出来事または状態) と, 参照時間にその事象から推論可能な状態 (以降, 完了状態) を導入する。そして, その完了状態の特性は推論によって得られるとし, そこで得られる完了状態のさまざまな特性が多様な解釈となると論じた。談話表示意味論 (Kamp and Reyle 1993, de Swart 1998) の枠組みで Nishiyama and Koenig (In Press) は英語の完了形を (5) のように意味定義した。

(5) 英語の完了形の意味

英語の完了形の意味は以下を談話に導入する。

- i. 文の事象記述 ϕ を満たす事象 ev と, その部分事象で, 同じ記述 ϕ を満たし, その時間的トレース (時間軸上で事象が占める時間) が参照時間 r に先行する事象 ev' 。
- ii. 参照時間 r と重複し, その範疇が未特定の自由変数 X である完了状態 s 。

定義 (5) では, 英語の完了形に特徴的な継続用法を説明するために, 事象記述を満たす部分事象が参照時間に先行して導入される¹⁾。そして, 未特定の自由変数 (あるいは変項) X の値はグライス流の推論, つまり I-Principle によって聞き手によって求められ, 発話時間に成立する完了状態が解釈される²⁾。

日本語の「ている」については, 例文 (1a) - (4a) にみられるように, 完了形の多様な解釈に, 進行の解釈が加わる。Nishiyama (2006a) では, 「ている」を非完結相の完了形とみなし, 統一的な意味から多様な完了の解釈と進行の解釈が得られるとし, (6) のような「てい」の意味を提案している³⁾。

(6) 「てい」の意味:

- a. 文の事象記述 ϕ + 「て」は事象 e の部分事象 e' を談話に導入し, e' の時間的トレースは参照時間 r に先行する。そして, e はすべての慣性の世界 (inertia worlds), つまり事象 e が完了するかどうかに関連し, 且つ, e の完了がさまたげられないような世界で, $\text{Max}(\phi)$ を満たす事象である⁴⁾。
- b. 「い」は「 ϕ + て」の出力 e' を入力とし, 状態 s を導入する。 s は時間的に r と重複し, その範疇は未特定の自由変数 X とする。 X の値は語用論的推論によって聞き手によって求められなければならない。

Max 演算子は事象記述 ϕ を満たす最大の事象を出力し、事象記述が状態記述の場合、出来事化に相当する機能を果たす⁵⁾。「て」は非完結相の演算子として機能し、記述事象の必ずしも記述を満たさない真部分と記述を満たす全体部分のいずれも出力することができる漠然性 (vagueness) を持つとする。さらに、「い」が完了状態を導入し、その範疇は英語の完了形と同じく語用論的推論で得られる。

英語の完了形と日本語の「てい」の意味を談話表示構造で表すと図 1 のようになる。

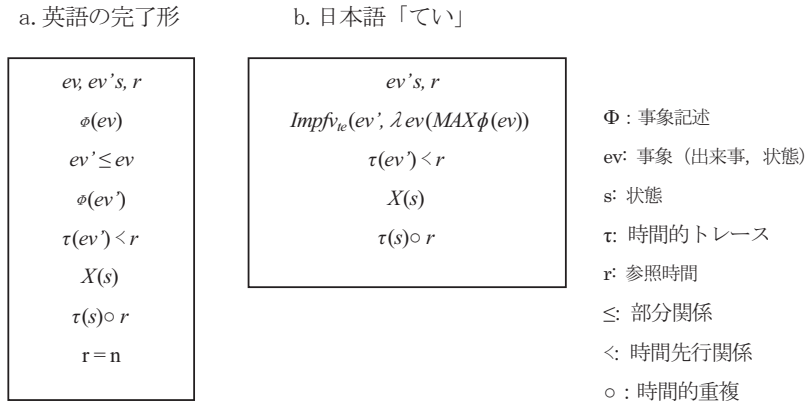


図 1 英語完了形と「てい」の談話表示構造

日本語「て」が非完結相として、記述事象の部分事象 (全体部分又は真部分) を導入するという漠然性を持つため、上記の例文 (1) a と b (a. たけしが手紙を書いている。b. Takeshi is writing/has written a letter.) のように、英語では進行形と完了形という別の形式で表現される解釈が日本語では「てい」の一つの意味から推論で得ることができる。

そして、例文 (2) a と b (a. 木が倒れている。b. Trees have fallen.) では、Trees fall (木が倒れる) という事象が過去に起こり、そこから推論される結果状態、木が倒れている状態が現在成立していると解釈される。例文 (3) a と b (a. たけしは富士山に登っている。b. Takeshi has climbed Mt.Fuji.) では、Takeshi __ climb __ Mt.Fuji (たけしが富士山に登る) という出来事が過去に起こり、そこから推論される現在の状態、例えば、「彼は別の山に登りたい。」とか、「彼は登山ルートを知っている。」などの状態が含意される。

しかし、含意される現在の状態について推論が難しい場合は、語用論的に不適格な発話となる。例えば、下記の例文 (7) の「ている」文では、故人聖徳太子が現在泳いでいる状態であると推論される文脈は稀であり、さらに太古の昔に聖徳太子が泳いだことから現在成立する状態を推論することは非常に難しい。そのため、適切な文脈がなければ推論が成立せず、語用論的に不適格文となる。例文 (8) は英語の完了形で不適格な文として、しばしば挙げられる例文であるが、これについてもやはり Einstein がかつて Princeton を訪れたという出来事から現在に成立する状態を推論することが非常に難しいから不適格文とみなされる (Michaelis 1998, Nishiyama 2006b)。(＃は語用論的に不適格文であることを示す。)

で得ることができ、その推論過程は同様に I-Principle で捉えられることになる。I-Principle (Principle of Informativity) とは、話者の最小化の格率 Maxim of Minimization と聞き手の推論 (語用論的増幅, pragmatic enrichment) の対として規定される。Informativity は、記述 q によって排除される states of affairs の集合が、記述 p によって排除される states of affairs の集合の真部分集合であるならば、p は q より informative であると定義される。I-Principle は以下のように表すことができる。(Atlas and Levinson 1981, Levinson 2000)

(12) I-Principle:

1. 話者はより情報を含む発話 (p) が利用できる際に、より情報の少ない発話 (q) を選ぶ。(最小化の格率)
2. 聞き手は話者の最小化の格率を前提に、世界知識を利用して、情報の少ない発話を最も明確な解釈に増幅する。(語用論的増幅)

つまり、英語の現在完了形や日本語の「ている」、さらに「た」の一部の用法では過去の事象と現在の状態についての明確な発話 (p) が可能であるのに、話者はより情報量の少ない発話 (q) を行い、聞き手はそれをより情報の多い解釈に増幅し、現在の状態についての解釈する。(12) は英語の完了形と日本語の過去形「た」について、より情報の多い発話 (p) とより情報の少ない発話 (q) の例である。

(13) a. p: Trees have fallen and trees are fallen.

q: Trees have fallen.

b. p: ここに財布があったし、いまもある。

q: ここに財布があった。

例文 (13a) では、q の情報の少ない発話から現在の状態 (trees are fallen) が推論され、例文 (13b) では、q であらわされた過去の状態から p の現在の状態が持続の推論を通じて解釈される。

しかし、英語の完了形および「てい」と「た」文の意味には大きな相違がある。上述の定義によれば、完了形や「ている」文では解釈される現在の状態は、完了形や「てい」の意味によって導入され、その未特定性は意味定義に組み込まれている。一方、「た」文で解釈される現在の状態はその意味に含まれておらず、「た」文自体には意味論的未特定性は組み込まれていない。つまり、どちらも解釈に語用論的推論を用いながら、一方は推論されるべき特性の存在が未特定の変項として意味に組み込まれており、他方は組み込まれていない。このような違いを有する「てい」と「た」文における語用論的推論を、どちらも I-Principle (I-implicature) のみで同様に説明することはできない。

実際、「てい」文や完了形文では、語用論的に適切な使用ならば、全ての使用例で適切に現在の状態が推論を通じて解釈される (Nishiyama and Koenig 2008)。しかし、日本語「た」については、「発見・想起の『た』」のような、限られた用法においてのみ、現在の状態についての推論が観察される。

さらに、英語の過去時制と日本語の「た」は、同じ過去形の意味を持ちながら、英語の過去時制の場合は「発見・想起の『た』」に見られる現在の状態についての推論が観察されないようである。そのため、西山（2009）と Nishiyama（2010）では、その推論傾向の違いを、英語と日本語の時制・アスペクト体系の構造分布的な違いによるものと論じている。

英語の過去形の状態文は現在完了形と scalar pair（意味的含意関係）を成す。例えば、現在完了形文（14）は相当する過去形文（13）を意味的に含意する。このような scalar pair が成立するとき、含意されるほうの項目である過去形を使うと現在完了形の意味ではないという Q-implicature が優先され、I-implicature が抑圧される（Levinson 2000）。一方、日本語は、状態記述と「てい」との共起性の低さと「る」が現在時制ではなく非過去であることから、状態の過去形文を意味論的に含意する現在完了形文（「てい+現在時制」）を持たず、scalar pair を形成しないため、過去形の状態文の使用は Q-implicature を誘発せず、I-implicature が抑圧されることがなく、「発見・想起の『た』」文に見られるような用法につながっている。

(13) I was busy.

(14) I have been busy.

英語では Q-implicature が優先され I-implicature が抑圧されるため、過去の状態文で持続の推論による現在の状態の I-implicature が現れず、過去の状態は現在には当てはまらないという Q-implicature による解釈が優勢となる。つまり、(15) に見られるような英語と日本語の時制・アスペクト体系の構造分布上の違いが英語と日本語の過去形解釈の違いに繋がっている（Nishiyama 2010）。

(15) a 英語： < 過去時制, 現在完了形 >

b 日本語： < 過去時制, ー >

（意味的含意関係の scale：無）

このように、「てい」と「発見・想起の『た』」の解釈は、いずれも I-Principle に基づく語用論的増幅ではあるが、一方は意味に内在する自由変数によって誘発され、他方は言語体系の構造分布上の特徴が誘因となっている。次節では、これらの完了形「ている」と過去形「た」の推論の違いを捉える推論過程のモデルを提案する。

2. 語用論的推論過程の二つのモデル

本節では前節に挙げた日本語「てい」と「た」の意味と解釈傾向の違いを捉える二種類の推論過程のモデルを提案する。語用論的推論は基本的にどのような意味を持つ発話でも可能であり、I-implicature による解釈の語用論的増幅も、どのような発話に対しても起こり得る反面、語用論的に必ず起こる必要のあるものではない。しかし、「てい」の多様な解釈は、適切に使用された全ての用例で、完了状態の範疇について推論され、解釈されない用例は語用論的に不適格

文となる。他方、「た」については、一部の用例でのみ現在の状態が推論されることが認められており、3節で後述するデータからも分かるように、英語の過去時制ではそのような推論はあまり見られない。さらに「ている」には解釈されるべき未特定の状態が意味に組み込まれており、過去形には解釈されている現在の状態は意味には組み込まれていない。これらの違いを捉える推論を誘発する仕組み、つまり、両者の推論過程のモデルを本節で提案する。

2.1 意味誘発型の推論過程モデル

「てい」および完了形の意味によって導入される完了状態の範疇は、自由変数 X として導入され、その値は推論によって求められる。この推論は、完了形に限らず、未特定の自由変数が言語表現によって導入された場合に、会話の参加者がコミュニケーションを成立させようとするなら、必ず行うものとする。これを完全特定性の原理 (The full-specificity principle) と呼ぶことにする。完全特定性の原理は (16) のように定義される。

(16) 完全特定性の原理

発話によって導入された自由変数の値は語用論的推論によって聞き手によって求められるなければならない。

言語表現によって導入される自由変数を含む例としては、代名詞、複合名詞や所有格構造 (Partee 1984) などがある。この原理によって聞き手は自由変数 X の値を求め、話し手は自由変数を導入する時、聞き手がその値を探すであろうということを期待することができる。

重要なことは、自由変数 X の値は聞き手によって推論されなければならないため、話し手は X を導入する際には、聞き手が話し手の発話の情報や文脈から正しい (意図された) 値を見つけるために要する推論を確実に行うことができるように X を導入しなければならない。たとえば、話者が例文 (17) を発し、意図されている X の値は (18) であるとする。話者は聞き手が (18) を推論できないなら、当然 (18) を意図するために (17) を使うことはできない。

(17) 君は授業を5回も欠席している。

(18) 君は単位を落とすかもしれないよ。

話し手 A が、同じ授業を受講している同級生で、その授業では授業の評価基準に出席が入らないし、出席も取っていないと信じている聞き手 B に対して、B が (17) の発話から (18) を推論できると誤って推論し、(18) を意図して (17) のように告げたとしても、話し手 A の意図 (18) は B に伝わらないかもしれない。つまり、聞き手 B は自由変数 X の値を適切に推論することができない。 X の値の推論に失敗した場合は、話し手がしばしば、「6回休んだ学生は自動的に落とすらしいよ。」などとさらに情報を加えたり、聞き手が発話の意図を尋ねるなど、会話の修復がおこなわれる。しかし、現実的に、話し手が自由変数 X を含む発話をする際には、自由変数 X の値は相互に推論可能であると話し手に見なされていなければならない。これを相互推論可能性の原理 (the Mutual Inferability Principle) と呼ぶことにする。

Clark and Marshall (1981) と Clark (1992) の相互知識 (mutual knowledge) の定義に倣い、相互推論可能性は以下のように定義される。

(19) 相互推論可能性 (Mutual inferability)

以下の条件を満たすとき、p は話し手と聞き手によって相互に推論可能である。

q:話し手がpと聞き手がpとqを推論することができることを推論することができる。

この定義の p が自由変数 X の値に相当し、q はそれ自身を含む自己参照型の陳述となる⁷⁾。そして、相互推論可能性の原理は (20) のように定義される。

(20) 相互推論可能性の原理 (the Mutual Inferability Principle)

適切に発話された発話の自由変数の値は話し手と聞き手にとって相互推論可能でなければならない。

これら二つの原理を使って、「てい」の解釈を導く推論過程のモデルをスキーマにしてみると (21) のようになる。

(21) 意味誘発型の推論過程モデル：意味内在型の不特定値推論過程

$\boxed{\dots X \dots}$ (発話の意味)

- ・自由変数 X がある場合、
- ・推論せよ、そして
- ・X の値をみつけよ。(完全特定性の原理)

ただし

- ・その値は相互に推論可能でなければならない。(相互推論可能性の原理)

$\boxed{X = \dots}$ (発話の語用論的解釈)

このように、「てい」および完了形の解釈は、意味に組み込まれた自由変数 X の存在に誘発されて推論される。推論そのものは語用論的推論だが、その推論を誘発するものは意味にあることがこのモデルから分かる。

2.2 体系誘発型の推論過程モデル

次に、日本語「た」に見られる持続の推論による現在の状態についての推論は、I-implicature でとらえられるが、「てい」と異なり、その意味の中に推論を誘発する要素が組み込まれているわけではない。通常は過去時制として扱われ、過去の事象を表すと見なされていることから分かるように、いつでも I-implicature が起こるわけではない。さらに、前述のように、とりわけ英語の過去時制では、あまり I-implicature は起こらないとされ、西山(2009)と Nishiyama(2010)では、「た」に見られるような I-implicature は、当該言語の言語体系に、その項目と意味的含意関係の対をなす項目が欠けている場合に誘発されるとしている。意味的含意関係の対が形成さ

れる場合、対となる二つの表現のうち、意味的に含意されるほうの表現を話し手が使用すると、含意するほうの表現に相当する解釈ではないという Q-implicature が優先的に誘発され、I-implicature が抑圧される (Levinson 2000)。しかし、Q-implicature が何らかの理由で生じない場合は、I-implicature による推論が可能になる。この推論の過程をモデル化すると (22) のようになる。

(22) 体系誘発型の推論過程モデル⁸⁾

- ・ 発話内容 p から q を導くデフォルト推論が存在し ($p > q$)、q は p を含意 (entail) するとき ($q \rightarrow p$)、会話の文脈や会話者が有する情報に矛盾しないかぎり、ある言語 A における p を表す発話 P に対して、聞き手は次の推論を行う。
- ・ P と同じ程度、簡潔に q を表す言語表現が存在するなら、
 - $\neg q$ (Q-Principle)
 - さもなくば、
 - q. (I-Principle)

つまり (22) の体系誘発型のモデルでは、ある内容 (事象) から、人々が世界の知識や常識に基づいて、ほぼ自動的に遂行するデフォルト推論 (例えば、持続の推論) が存在する場合、その内容 (事象) を表現する発話に、もしも言語構造分布的な制約がなく、そのデフォルト推論が文脈に沿うものであれば、たとえ意味に推論を誘発する未特定の要素が組み込まれていなくても、発話の聞き手は、そのデフォルト推論を遂行するものと考ええる。そして、ここでの言語構造分布的な制約とは、発話の表現と、scalar pair、つまり意味的含意関係をなす表現がその当該の言語体系に存在する場合に誘発される Q-implicature である⁹⁾。英語の状態文で過去形を選んだ場合は、意味的にそれを含意する現在完了形の存在のために、過去の状態はすでに現在には成立しないという推論、Q-implicature が生ずる。日本語の場合は対応する現在完了形文を欠くため、Q-implicature が抑えられ、I-implicature が生ずる。

しかし、デフォルト推論による I-implicature も、Q-implicature もいずれも文脈や会話者の持つ知識・情報と矛盾する場合は生じない。これらは意味誘発型の推論ではないので、文脈などによって推論が生じないことは発話の語用論的適格性に影響しない。それゆえ、「た」文では、発見や想起など、特定の文脈でのみ推論が起こると考えられる。

以上に提案した2つの推論過程のモデルに従うと、「ている」の適切な使用には推論による情報の追加が不可欠であり、他方、「た」の使用では必ずしも推論による情報の追加は必要ではなく、英語の過去時制では Q-implicature が生ずるために、むしろ I-implicature は抑えられる。

次節では、Nishiyama and Koenig (2008, In Press) による英語の完了形と「ている」の解釈と推論についてのコーパス研究と、今回、新たに調査した日本語「た」と英語の過去時制の解釈についてのコーパス研究の結果を比較し、考察を加える。そして、「ている」と「た」の、実際の使用における推論傾向に、二つの推論過程のモデルの違いがどのように反映されているかについて考察する。

3. 完了形と過去形の解釈データ

3.1 完了形の推論データ

Nishiyama and Koenig (2008, In Press) では、英語の現在完了形と日本語の「てい(る)」の実際の使用例の調査を行い、適切な使用の全ての用例について、非常に単純な推論による完了状態の解釈が行われていることを明らかにしている。この調査ではさまざまなジャンルのコーパスから英語の完了形(606例)と日本語の「ている」(1,186例)の用例を取り出し、その用例の発話時点、或いは執筆時点で成立していると解釈される状態で、その状態が成立しているという解釈がなければ、前後の文脈との間に不整合を生じるような状態を完了状態の解釈とみなし、その完了状態の解釈に必要なとされる推論を調査、分類している。

調査の結果、英語の完了形の実際の解釈には、四種類の推論規則が使われる必要があることが明らかにされた。それらの規則とは、持続の推論に基づく規則(類型I)、言語行為に関わる推論規則(類型II)、その下位分類として、(a)言語行為の誠実条件に基づく推論規則(類型IIa)と(b)言語行為の事前条件に基づく推論規則(類型IIb)、世界や文脈の知識に基づく常識的含意規則(Asher and Lascarides 2003)(類型III)である。類型Iは用例(23)に見られるように記述事象として過去に導入された状態の持続や用例(24)のように出来事の直接結果状態の持続が推論される。類型IIaでは、用例(25)のように、発話行為動詞の補部の状態が成立していることが推論される。類型IIbは、用例(26)のように、会話の初めに認識動詞の完了形を用い、経験を尋ねる発話から、話者がその話題について話したいということを推論する。そして、類型IIIでは、導入された出来事から、世界知識や常識を使った推論で現在の状態を推論し、用例(27)に見られるように、現在成立していると解釈されるXの値は同じテキスト内に存在する(推論規則の詳細についてはNishiyama and Koenig (2008, In Press)を参照)。

類型I: 持続の推論

(23) ... he *has been* a member of her household ever since.

(X=He is a member of her household.)

(Cather 1996:24)

(24) Yeltsin's health *has become* a major issue in the closing days of Russia's presidential race.

(X=Yeltsin's health is a major issue in the closing days of Russia's presidential race, ...)

(*Wall Street Journal* 7.1. 1996, Graff 1995-1997)

類型IIa: 言語行為の誠実条件に関わる推論

(25) Sumitomo *has said* its losses from Mr. Hamanaka's trading stand at \$1.8 billion.

(X=Sumitomo's losses from Mr. Hamanaka's trading stand at \$1.8 billion.)

(*Wall Street Journal* 7.1. 1996, Graff 1995-1997)

類型IIb: 言語行為の事前条件に関わる推論

(26) A: *Have you seen* DANCING WITH WOLVES? (X=I want to talk about the movies.)

B: Yeah. I've seen that, , that's, uh, that was a really good movie.

類型 III：常識的含意に基づく推論

- (27) House Democratic leader Richard Gephardt of Missouri, who has been less enthusiastic about budget cutting than Mr. Clinton, *has played* a key role in recruiting the party's congressional candidates. Many are merely reflecting his priorities, as opposed to those of the White House. (=X) (Wall Street Journal 7.1. 1996, Graff 1995-1997)

また日本語の「ている」文では、上述の類型 I と IIa の推論がみられた。そしてこの調査では、類型 III の用例はみられなかったが、別に類型 III の用例が確認されている。進行と結果の解釈では類型 I (用例 (28)), 発話行為や認識動詞を使い補部の状態を伝える例が類型 IIa (用例 (29)), 経験用法と見なされてきた用法 (用例 (30)) では、類型 III の推論規則が使われていることが示された (Nishiyama and Koenig 2008)。

類型 I：(出来事の直接結果の) 状態持続

- (28) 日本の衛星メーカーは、…実用衛星受注の道を事実上閉ざされている。(X= 実用衛星受注の道は閉ざされている。) (Graff and Wu 1995)

類型 IIb：言語行為の誠実条件に関わる推論

- (29) 米政府は現状では日米政府調達協定に違反するとみなしている。
(X= (日本の自由貿易は) 日米政府調達協定に違反する。) (Graff and Wu 1995)

類型 III：常識的含意に基づく推論

- (30) 「管理人の A さんは犯人じゃありません。=X」
…「(犯人は) 初犯もやらないようなミスをやっているでしょう。」
(文脈：A さんには前科があり、犯罪のやり方に詳しい。) (由良 1985)

表 1 は英語の完了形と日本語「ている」の結果をまとめたものである。英語の完了形も「ている」についても適切に使われた全ての用例について、その解釈を導く推論が適切に行われていることが分かる。つまり前節で提案した、義務的に語用論的推論を誘発する意味誘発型の推論過程を反映した結果であるといえる。

表 1 英語の完了形と日本語「ている」の解釈における推論¹⁰⁾

	類型 I	類型 IIa	類型 IIb	類型 III	合計
英語の完了形	496	51	17	28	592
(%)	81.98	8.43	2.81	4.63	97.85
ている	1,055	130	0	0	1,185
(%)	88.95	10.96	0	0	99.91

3.2 過去形の推論データ

今回の過去形についての調査では、新聞 (Wall Street Journal, 日本経済新聞) と自然会話デー

タ (Switch-board Corpus, 『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話1 (日本語母語話者同士の会話)』) から擬似ランダムに約1,000例の英語の過去形と日本語の「た」文をそれぞれ取り出し、その中で状態記述文の用例について、I-implicatureによる持続の推論の解釈が行われているかどうかについて調査した¹¹⁾。つまり、持続の推論により、記述された過去の状態が現在も継続していると解釈されるかどうかを調査した。

英語の過去形の事例については、従属節内の過去形も含めて抽出し、その中で事象記述が状態記述であるものについて、その記述された状態が持続していると解釈されるかどうかを調べた。なお、仮定法や法助動詞の過去形は調査の対象から除き、否定と過去完了は状態と見なした。過去完了については過去の時点で成立する完了状態が持続しているかどうかを調べた。

次の用例(31)と(32)はそれぞれ新聞と電話での自然会話のデータの中から、持続の推論により過去の状態が現在も成立していると見なされる例である。用例(31)は過去の2社の関係からGeneral Re社はその会社を過去に知っていたという記述であるが、前後の文脈、および、過去に知っていたなら現在も知っているだろうという推論より、その状態は現在も持続していると解釈される。用例(32)では話者Bが過去に読んだ記事に載っていたスタイロフォームの自然分解に要する時間について、過去形を使用して説明している。20年から30年であるという説明が、過去に読んだ記事の内容として過去形でなされているが、その命題は現在にも当てはまることが推論され、解釈されている¹²⁾。

- (31) General Re already **knew** the company well: The two reinsurers are neighbors, and a fair number of National Re's senior managers, including William D. Warren, National Re's chairman, are alumni of General Re. (*Wall Street Journal* 7.1. 1996, Graff 1995-1997)
- (32) B: I, uh, saw an article the other day in Ann Landers that talked about how long it takes, like a cigarette butt, to decompose, and I think it **was** between twenty and thirty years.
A: Is that right?
B: Yes. (Graff, Canavan and Zipperlen 1998)

全体では、過去時制で表される状態文の用例、367例中、7.1%の26例の用例で類型Iの推論による解釈が可能であった。その26例の中には、会話の中で逸話(物語)として語られる過去の出来事の文脈の中での過去の状態文(5例)が含まれる。物語時間は通常物語内での独立した時間と見なされる(Almeida 1987)。新聞記事は、その日に起こった出来事を描写するので、基本時制が過去形であることが多い。しかし会話の時間軸の中で発話され、推論によって現在の状態の解釈が必要とされるような過去の状態文の例は非常に少ないと言える。

次に、日本語「た」については、仮定法以外にも関係詞節での形容詞的な働きをする「た」の用例や条件や時の副詞内で過去時制として扱うことができない用例があることなどから、今回は、主節の「た」に限って用例を擬似ランダムに抽出した。英語の過去時制と同様、状態記述に「た」が付加されている用例を集め、否定と過去完了は状態として扱った。次の用例(33)と(34)は新聞から、用例(35)と(36)は会話データから得られた例である。

- (33) 「信託銀行のドル買い意欲が強い」(東海銀行資金為替部)との声も多かった。
(日本経済新聞 1994, Graff and Wu 1995)
- (34) 日本合成繊維(大阪市, 植松健悟社長)を今秋をめどに解散する方針を固めた。日本合繊は…設立した共同販社。しかし繊維各社の足並みがそろわず, 組織は形骸(が)い化していた。
(日本経済新聞 1994, Graff and Wu 1995)
- (35) F2: 超いい人だった。
F1: <笑い>いい人だ。
F2: そう, <そういう人>{<}。
- (36) F15: スーパー。[少し驚いた感じで]
F16: で, そういう系で最悪(うん), パンとかは売ってたよ。
F15: <笑い>むっちゃ最悪だね<笑いながら>。
F16: うん, 最悪ね。
(東京外国語大学 2005)

用例(33)はその日の為替動向についての意見をまとめたものであり, (33)のような意見があるという現在の状態を表している。用例(34)も共同販社を解散する方針が決まった根拠となった状態は現在も持続していなければならないと解釈される。親しい友人同士の会話の用例(35)では, 話者F2は過去の出来事を紹介しながら, ある人物の評価を伝えており, その評価は現在にも当てはまることが意図されていることが, あとに続くF1とF2のやり取りから読み取れる。用例(36)では, 翌日のテニス合宿の際の昼食や夜のすごし方の相談をしており, 話者F16は, 行き先の環境についての現在の状態を伝えることを意図している。

集計した結果, 過去時制「た」の用例1023例中, 過去の状態文, つまり状態の「た」文は316例だった。その中で, 上記の例(33)-(36)にみられるような, 過去時制で表された状態が, 現在(発話時点)にも成立すると解釈される用例は91例あり, 過去の状態文中では28.8%を占めていた。これらの英語と日本語の過去時制の状態文についての解釈の結果をまとめると表2のようになる。英語の過去時制の状態文と比較すると, 20%以上多くの事例で持続の推論による現在の状態の解釈が行われていることが分かる。これは, 前節の言語体系誘発型の推論過程モデルで推論が誘発されていると考えれば説明することができる。英語の過去時制では意味論的含意関係を成す現在完了形とのペアが成立するためQ-implicatureが優先され, 過去形の状態文の使用では, I-implicatureによるデフォルト推論が抑えられ, あまり多くの事例でI-implicatureが得られない。日本語「た」においては意味論的含意関係を成すペアが成立しないため, Q-implicatureによってI-implicatureが抑えられないため, 英語の過去形より20%以上多くの事例, つまり28%以上の事例で現在の状態についての持続の推論が行われており, 前節の体系誘発型の推論過程のモデルを反映した結果であるといえる。さらに, 用例(33)-(36)に見られるように, いわゆる発見・想起の「た」のような文脈以外でも, 同様の推論が, 実際には非常に頻繁に起こっているということをこの調査は示している。

表2 英語と日本語の過去形状態文の推論

		過去形の 用例数	状態記述 + 過去時制		
			A) 用例数 (過去 形に対する%)	B) 状態の 持続	A) に対する B) の%
英語	新聞 ^{a)}	745	211 (28.3%)	16	7.6%
	自然会話 ^{b)}	251	156 (62.2%)	10	6.4%
合計		996	367 (36.8%)	26	7.1%
日本語	新聞 ^{c)}	766	166 (21.7%)	45	27.1%
	自然会話 ^{d)}	257	150 (58.4%)	46	30.6%
合計		1,023	316 (30.9%)	91	28.8%

a) *Wall Street Journal* 7.1. 1996 (Graff (1995-1997)

b) Switchboard Corpus (Graff *et al.* 1998:SW2001-SW2019)

c) 日本経済新聞, 07, 01, 1994. (Graff and Wu 1995) .

d) 『BTSによる多言語話し言葉コーパス - 日本語会話1 (日本語母語話者同士の会話)』
(東京外国語大学 2005)

先の3.1節における英語の完了形と「ている」のコーパス研究の結果と、本節の英語の過去形と「た」のコーパス研究の結果を比較すると、その違いは、2節で提案した二つの推論過程のモデルの違いを正しく反映している。完了形と「ている」では、出来事記述と状態記述を含むすべての事象記述の完了形において、ほぼ全ての用例について現在の状態についての推論が行われ、その中で、80～90%近くの用例では、持続の推論によって解釈されている。他方、過去形状態文については、英語では約7%、日本語では約28.8%の用例で持続の推論に基づく解釈が認められた。これは、両言語ともに、完了形と「ている」の現在の状態の推論例に比べると、少ないだけでなく、英語と日本語の間で大きな差が見られる。つまり、完了形では現在の状態は必ず語用論的推論によって解釈されるが、過去形の場合は必ずしも現在の状態は推論されず、英語の過去時制よりも、日本語の「た」文のほうが、現在の状態が推論によって解釈される傾向が大きいことが分かる。そしてこれらの結果は意味誘発型と言語体系誘発型の推論過程の違いを反映している。

結び

本稿では日本語の完了形「てい」と過去時制「た」の解釈に使用される語用論的推論がどのように生ずるかについて、二つの推論過程のモデルを提案した。「てい」の解釈の際の推論は意味に内在する不特定の自由変数の存在から誘発され、「た」については時制・アスペクト体系における構造分布がその推論の発現度を左右することが分かった。さらに、日本語と英語の完了形と過去形のコーパス研究によって、両言語の完了形と過去形の実際の使用における推論の出現データが、これらの二つの異なるタイプの推論過程を裏付けていることを示した。

注

*本稿は2010年4月3日立命館大学で開催された言語学ワークショップ「グローバリゼーションの中の日本語—その感性と活力」での口頭発表「『ている』と『た』から日本語の文脈依存性を考える」に大幅な加筆、修正を行ったものである。

- 1) 文の記述を満たす事象が状態の場合、その subinterval property により事象全体と一致しない真部分も記述を満たし、その真部分さえ参照時間に先行すれば全体事象の継続が可能になる。記述が出来事記述である場合、記述を満たす全体事象と部分事象は一致し、全体事象が参照時間に先行することになる。
- 2) 英語の完了形についての膨大な先行研究についてはここでは論じないが、Nishiyama (2006b) または Nishiyama and Koenig (In Press) にそれらの問題点がまとめられている。
- 3) 「ている」の多様な解釈について、「ている」は多義性を持つと分析する先行研究の詳細については、Nishiyama (2006) にまとめている。
- 4) 慣性の世界については Dowty (1979) をもとにした Portner (1998) の考えに従っている。
- 5) 詳細は Egg (2005) と Nishiyama (2006a) を参照のこと。
- 6) 意味論では、伝統的に過去時制を、記述事象が出来事の場合は、その時間トレースは参照時間に含まれ、状態の場合は参照時間と重複する、或いは、参照時間を含むと定義してきた。ここでは、このような選言的定義を避け、事象構造の部分全体関係を利用して過去時制に統一的な定義を与えている。
- 7) 相互推論可能性についての詳細は Nishiyama (2006b) を参照。
- 8) 言語の構造分布に関わる推論モデルなので、構造誘発型とするべきであるが、構造という用語は統語構造という意味にもしばしば使われるため、ここでは体系誘発型とした。
- 9) Q-implicature もデフォルト推論の一種であるが、世界の知識や常識に基づく推論ではなく、言語の構造分布に関わる会話参加者の言語知識から生ずる推論である。
- 10) 合計が僅かに100%を下回っているのは、動詞の曖昧性のため類型Iの中でも記述状態の持続か結果状態の持続かが明らかでなかったもの、あるいは不完全な自然会話のために、判別の難しい数例を、その他に分類しているためである。調査の詳細は Nishiyama and Koenig (2008) を参照のこと。
- 11) 現在の状態についての推論は、2節の推論過程モデルによると、持続の推論に基づく I-Implicature だけではなく、Q-implicatures も可能であるが、本調査はパイロット調査として I-Implicature のみに焦点を当てている。
- 12) ある時点で命題が真となる場合、その命題を範疇(特性)とする状態が成立していると考えられる (Ismail 2001)。

参考文献

- Almeida, Michael J. 1987. *Reasoning about the Temporal Structure of Narratives*. University at Buffalo, the State University of New York. Ph.D Dissertation.
- Asher, Nicholas and Alex Lascarides. 2003. *Logics of Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Atlas, Jay David, and Stephen C. Levinson. 1981. "It-clefts, informativeness, and logical form." *Radical Pragmatics*, ed. by Peter Cole. New York: Academic Press. 1-61.
- Cather, Willa. 1996. *O Pioneer!* Raleigh: Alex Catalogue.
- Clark, Herbert H. 1992. *Arenas of Language Use*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H, and Catherine R. Marshall. 1981. "Definite Reference and Mutual Knowledge." *Elements of Discourse Understanding*, ed. by Aravind K. Joshi, Bonnie Lynn Webber, and Ivan A. Sag, Cambridge: Cambridge University Press. 10-63.
- De Swart, Henriëtte. 1998. "Aspect shift and coercion." *Natural Language and Linguistics Theory* 16. 347-385.

- Dowty, David R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht; Boston: D. Reidel Pub.Co.
- Egg, Markus. 2005. *Flexible Semantics for Reinterpretation Phenomena*. Stanford: CSLI Publications.
- Graff, D. 1995-1997. *North American News Text Corpus*. Philadelphia: Linguistic Data Consortium, University of Pennsylvania.
- Graff, D., A. Canavan, and G. Zipperlen 1998. *Switchboard-2 Phase 1*. Philadelphia: Linguistic Data Consortium, University of Pennsylvania.
- Graff, D. and Z. Wu 1995. *Japanese Business News Text*. Philadelphia: Linguistic Data Consortium, University of Pennsylvania.
- Grice, Paul. 1975. "Logic and conversation." *Syntax and semantics 3: Speech acts*, ed. by Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- Horn, Laurence R. 2001. *A Natural History of Negation*. Stanford: CSLI Publications.
- Ismail, Haythem O. 2001. *Reasoning and Acting in Time*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Kamp, Hans, and Uwe Reyle. 1993. *From Discourse to Logic, Part 1, 2*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive Meanings*. Cambridge: MIT Press.
- McCawley, James D. 1971. "Tense and Time Reference in English." *Studies in linguistic semantics*, ed. by C. J. Fillmore and D. T. Langendoen. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- McDermott, Drew. 1982. "A temporal logic for reasoning about processes and plans." *Cognitive Science* 6. 101-155.
- Michaelis, Laura. 1998. *Aspectual grammar and past-time reference*. London, New York: Routledge.
- 西山淳子 2004. 「完了相 (Perfects) 再考」『言語研究の接点－理論と記述』東京：英宝社。
- Nishiyama, Atsuko. 2006a. "The meaning and interpretations of the Japanese aspectual marker *-te-i-*." *Journal of Semantics* 23. 185-216.
- Nishiyama, Atsuko. 2006b. *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Nishiyama, Atsuko and Jean-Pierre Koenig. 2008. "The Discourse Functions of the Perfect." *Constraints in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins. 201-223.
- 西山淳子 2009. 「英語と日本語の過去形の語用論」『立命館言語文化研究』21巻2号 169-181。
- Nishiyama, Atsuko. 2010. "English and Japanese Stative Expressions in the Past." *JELS* 27. 197-206.
- Nishiyama, Atsuko and Jean-Pierre Koenig. In Press. "What is a perfect state?" *Language*.
- 大堀壽夫 1993. Rikkyo-93. In *BS Archive*. Tokyo: University of Tokyo.
- Partee, Barbara. 1984. "Compositionality." *Varieties of formal semantics: Proceedings of the fourth Amsterdam colloquium*, Ed. by Frank Veltman, Dordrecht: Foris Publications. 281-311.
- Portner, Paul. 1998. "The progressive in modal semantics." *Language* 74. 760-787.
- 東京外国語大学大学院地域文化研究科 2005. 『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話1（日本語母語話者同士の会話）』監修 宇佐美まゆみ。
- 由良三郎 1985. 『葬送行進曲殺人事件』東京：新潮社。